

松久勝利名誉教授への献辞

松本 長彦¹⁾, 山崎 哲司²⁾, 庭崎 隆³⁾, 古賀 理和³⁾

- 1) 愛媛大学法文学部
- 2) 愛媛大学教育学部
- 3) 愛媛大学教育・学生支援機構

Dedication to Professor Emeritus Katsutoshi MATSUHISA

Osahiko MATSUMOTO¹⁾, Tetsuji YAMASAKI²⁾, Takashi NIWASAKI³⁾, Masakazu KOGA³⁾

- 1) Faculty of Law and Letters, Ehime University
- 2) Faculty of Education, Ehime University
- 3) Institut for Education and Student Support, Ehime University

松久勝利先生は、昭和19（1944）年7月2日に北海道にお生まれになり、昭和43年3月に東北大学文学部哲学科美学美術史学専攻をご卒業、その後東北大学大学院文学研究科修士課程美学美術史学専攻に進学され、昭和46年同研究科修士課程をご修了、引き続き同研究科博士課程に進学されましたが、昭和47年1月に同課程を退学し、同年2月東北大学文学部助手に就任されました。昭和50年5月に愛媛大学教養部講師として本学に着任され、昭和54年4月に助教授にご昇任、平成8（1996）年4月に教養部改組に伴い法文学部人文学科に移籍され、同年9月教授に昇任されました。この間一貫して、愛媛大学における唯一人の理論的芸術学（美学・美術史学）の研究者として、教育研究の中心的役割を担ってこられました。平成14年4月に、当時の鮎川恭三学長よりの懇請に応じて、本学の共通教育の運営を全学的立場からコーディネートするために大学教育総合センターに副センター長として移籍され、平成16年同センターが教育・学生支援機構の設置に伴って同機構の中の教育開発センターに改組されると、教育開発センター副センター長にご就任、平成18年4月に同センターが共通教育センターに改組された後は、共通教育センター副センター長として、教育研究に

おける指導的役割を果たされるだけでなく、本学の共通教育の改革、充実及び円滑な運営並びに本学のFD活動推進の中核となる役割を担ってこられました。平成22（2010）年3月31日をもって愛媛大学を定年のためご退職なさいました。先生の長年の功績に対し、平成22年4月1日付で愛媛大学名誉教授の称号が授与されております。また、同日付で愛媛大学アカデミックアドバイザーに委嘱され、ご退職後も当分の間、共通教育の運営に関して、ご指導ご助言をいただくこととなっております。

先生は、昭和50年に本学にご着任以来、35年間一貫して共通教育及び専門教育の授業を担当してこられました。赴任当初はジーパン姿で講義室に現れて、当時の学生たちを驚かせたことがありましたが、それ以降もほとんどネクタイは着用されないなど、独特のスタイルを貫かれました。講義は、絵画を中心とした芸術作品を素材として芸術の本質に迫っていくという、先生の研究スタイルを反映した知的刺激に満ちたもので、さらに学生自身に作品解釈を行わせる仕掛けを工夫して、いち早くアクティヴ・ラーニングの手法を取り入れた授業も実践しておられました。芸術を「価値体験の場」としてまさに体験させるという姿勢に貫かれた、先生の温厚で真摯な教

育活動に接して、芸術に向き合う姿勢を学んだ学生は、数え切れません。

一方、芸術学のご研究においては、20世紀ドイツの現象学・存在論・解釈学の系譜の美学研究から出発され、さらにアーサー・ダントーを始めとする英米系美学における芸術の制度理論が提起する Artworld という概念の研究においては、制度理論のもつ欠陥を指摘しつつも、Artworld 概念には芸術の存在根拠を考究する上で豊かな可能性が認められるので、この概念を芸術史の視点から再構築すべきであることを提唱されました。また、パウル・クレーやゴッホ等の絵画作品に即して、美術史学と哲学的美学の橋渡しを目指したご研究においては、芸術的想像力に関するいくつかのご提案をなされています。さらに、これら3つの芸術学研究を統合する試みとして、芸術の存在論的根拠を芸術に潜む根源の問いから明らかにするご研究に取り組まれました。そして、価値体験の場としての芸術が芸術家と観者との対話を介して出現させる世界 (Artworld) には、ある根源の問いが作動している、即ち「なべて優れた芸術は分かることへの誘いとしての問いを孕んでいる」という、独創的な原理的視座を提唱され、これを検証するために、谷川俊太郎の詩集『定義』や川端康成の『雪国』の解釈を試みておられます。この原理的視座に先生の芸術学研究が集約されています。

先生は、学生時代にスキージャンプ競技で国体にも出場されたと伺っております。愛媛大学も、スキージャンプのように一気に改革の実を挙げることができればよいのですが、特に教育においては、そうも参りません。先生が人知れずなさってこられたご苦勞の数々を水の泡にしない、ということ肝に銘じつつ、教育改革に取り組んで参ります。先生の今後のますますのご健康とご活躍をお祈りして、献辞とさせていただきます。